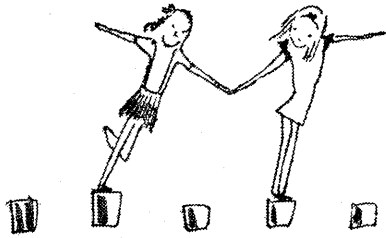


若いお母さんたちへ

はるにれの会

山本 直子



「二番目のお子さんですか？ ずいぶんゆったり育って
らっしゃること。」

それが、病院や市の検診ににかけて最初に言われた言葉でした。まわりの子は、わけのわからぬ検診に、ここぞとばかりに泣いている中で、一人興味深げに辺りを見渡しているのがわが子でした。そんな様子から、二番目の子どもとまちがえられたのでしょう。良く言えば神経質に育てていない、悪く言えば手抜きをしているということでしょうか。親としての自分を客観的に見ると、とにかく子育てに気負わないように自然体でやっていこうとしていたように思えます。と、まあ、かっこよく言えばそうなるのですが、実のところ、自分の毎日の生活を、子育てで、埋めつくしたくはなかったというのが本音です。その結果、子育ての本を読むために、子育てを少しわきにおくという本末転倒な状況さえ出現しました。それでも、自分を豊かにすることは豊かな子育てにつながるという大義名分を印籠にし、後ろめたさもちょっとびり加わって、涙の味のする子育て奮戦記が始まった

のでした。

そんな育児の毎日の中で、ともかくも私が大切にしてきたことは、この子がこの子であるという事です。とともに、母親である私も自分が自分であることを大切にしたいと思うようになりました。私のところでは、おじいちゃんおばあちゃんと同居なので、「親としての自分」を見つめる機会も悲しいかな、たくさんあります。おばあちゃんはいつも言います。

「孫ってかわいいわね。自分が子どもを育てた時には夢中で、子どもがどう育っているとか、おもしろいか思わなかったわ。でも、孫となると、客観的に見ることができるし、かわいいなと本当に思うわ。」

と。その言葉を聞くたびに、私は夢中になっていないな、子どもをずいぶん客観的に観察しておもしろがっているなあ、これでいいのかなあと思ったものです。おばあちゃんは子どもをあやすのが上手で、反対に私は構えてしまつて、あまりうまくいきません。おばあちゃんは編み物が上手で、あつという間にセーターもできてしま

うのに、私は本を読むのが大好きで、編み物も遅々として進みません。客観的に見ても、私はどちらかというと母親商売にはあまりむいていないなと思うのです。友人に聞いても、わが子は本当にかわいいと言うのに、私はいま一つ母親商売に乗り気ではなく、なんとなくピンとこないのです。今までもこんな体験いくつもあったなあと思ひ返してみると……そうです。指折り数えて楽しみにしていた遠足や運動会が、実際当日になつてみると、バタバタと一日が過ぎ、期待したほどではなくて、なんとなく拍子抜けしたという感じに似ているのです。

そこで私は一種のあきらめでもないけれど、いい母親になるために無理するのはよそう。私は私でいよう。そのかわりこの子がこの子でいようとすることを無理してねじ曲げたりするのはよそう、そう思いました。これは決して、自立のためなどというつき離れた子育てではなかったことだけは弁解させて下さい。

ともかくそういう気持ちで始めた子育てにも、障害物は多くありました。たとえば育児書や昔からの言い伝

え。抱き癖はよくない。指しゃぶりはよくないなどなど。けれども、私は一切を無視しました。泣いている時は泣きやむまで抱き、指しゃぶりもやりたいだけやらせました。十カ月の現在、娘は抱かれると、「自分で動きたい」と泣き、いたずらばかりして指しゃぶりを思い出す気配すら見えます。そして今は添い寝。これも、そのうち卒業していくことでしょう。私はいつも、そうした卒業を待ちたいと思います。そして、もしかしたら、娘も小さな心の中で、私の毎日の卒業を待ってくれているのかもしれない。そんなささやかな卒業のでき事を、今日はお話ししましょう。

数日前のことです。十カ月に入った娘は、突然下痢を始めました。一日に八、六回もうんちをし、そのたびにおむつ、おむつカバー、ずぼん、くつ下などがうんちだらけになるという毎日が続きました。病院では、ロタウイルス感染症と診断され、うんちのたびの着がえと洗濯でぐったりしてしまうほどでした。

「一日、二日入院して点滴をしましょう。そうすれば、

すぐに治りますよ。」と、病院で言われた時、私はすぐさま、お願いします、と書いていました。前日から少しくったりしている娘を見ながら「もし、入院と言われたら、すぐにでもしよう。」と主人とも話していたのです。私も数回入院したことがあり、点滴は大変だけれど、それさえすめば隠やかな日々というのを想像していました。ところが、現実には想像とはかけ離れたものでした。

点滴が始まるやいなや、「お母さんは、部屋から出て下さい。」と冷たく言われ、部屋の外で、娘の泣き叫ぶ声をじっと聞いていなければなりません。娘は、生まれた時からあまり泣く方ではありませんでした。一人遊びが好きで、毎日ゴソゴソいろいろなところをいたずらをしては、「あらあら」という私の声に、うれしそうにニコニコしている子です。ころんでも「あれ？」というような顔をして、またひとりでハイハイの旅に出て、その先でまたいたずら。そんなことのくりかえしで、母親べったりという感じではない子でした。私も特に無理して遊ぶこともせず、娘を追いかけていたずらを楽しんで

見ているという感じだったのです。ところが、いえ、だからと言った方がよいかもしれません。娘は無理矢理何かをされるといふ事を極端にいやがりました。まして、母親のいない所で白衣を身にまとった知らない人々におさえつけられ注射をされる。それは娘にとっては、命の危機さえも感じる恐怖だったのでしょう。今でもあの時の悲痛の叫びは、私の心をえぐるように耳もとに聞こえてきます。私の心をえぐる……。それは、あの時の娘の悲しみがもどってくるからだけではありません。むしろ、私の悲しみ、心の痛みがもどってくるとも言えるでしょうか……。

泣き叫ぶ娘の声を扉の外で聞きながら、私は、いっしょうけんめい自問していました。娘が入院することを、私は娘のためにOKしたのだろうか。はやく良くなっほしいというのは、本当に娘のためだったのか。心の隅で、洗濯にうんざりし、夜中起こされることにうんざりし、私のために早くよくなっほしいののではないか。それで入院を軽く承諾してしまったのではないか。

娘の悲しみに満ちた泣き声は、娘の痛みとともに、私の悲しみを運んできたのでした。私はドアのノブを握りしめて、ごめんね、ごめんね、と泣きました。

あの脂肪のたくさんついた手のいったいどこに針をさすのだろう。そう思いながら、おそるおそる病室に入っていくました。点滴の針を手の甲にさされた娘は、腕を板に固定され、体中におもりをつけられて、ねがえりはおろか、身動きさえできないようにされてしまいました。針をさした後も一時間は、恐怖のために気が狂ったように泣きました。私はそばに行つて、いっしょうけんめい声をかけたり歌を歌ったりしましたが、娘は私の心を見透しているかのように、私を拒否し泣き続けました。少し静まったかと思うと、このまま気が狂ってしまったのではないかと思うほど、突然ものすごく泣くのです。そして、やっと落ち着いたあと、今度は固定された体との戦いでした。ふだんから活発な娘は、じっとしていることがありません。それが、五時間以上もおもりをつけられ、同じ体勢を強制させられたのです。大

人だつてまいつてしまふにちがいありません。娘は悲しいほど泣きました。それでも時々あやすと笑ってくれるのが唯一のなぐさめでした。

これではいけない。こんな代償をはらつて点滴をする必要が本当にあったのだらうか。確かに脱水状態になれば必要かもしれないけど、娘の状態はそこまでいいないということは、私も知っていました。「退院しよう……」。大人の食事と同じ時間にいっしょに運ばれてきた冷たい離乳食を食べさせながら、私はそう決心しました。娘は点滴が終つたあと、私から決して離れようとはしませんでした。他の人があやしても、泣いて私にのみついてきました。いつもなら、一人で自分の世界に入つてしまい、私もなんとなくじゃまをしないでお互いを認めあつていた間柄から、突然百パーセントつきあう間柄へと変わつたのです。私は、少々とまどいました。おそらく、母親商売の得意な人には、ごく自然なことなのでしょう。けれども、私には、思ひのほか労力を必要とするものでした。娘もふだんと違って、いっしょうけん

めい笑つて楽しもうとしているかのように、ケタケタと何度も何度も笑つてくれました。そして、今までにはなかった新しい信頼関係のようなものが、その時生まれたのでした。

翌日、また点滴をするという看護婦さんの言葉に、私は直接先生のところへお願いに行き、できれば退院したいと申し出ました。先生は、点滴みたいに体に良いことを、なぜそんなに拒否するのかと、いぶかしげな顔をなさっていました。が、まあ、お母さんが泣くほどいやな事なら……と、退院を認めてくださいました。

娘をおぶつて荷物を持つて雪の中をとぼとぼ帰る道で、もしかしたら、私はとんでもない間違ひをしでかしてしまつたのではないかと思ひました。今日、点滴をしないで、もっと病気がひどくなつたら……、という考えが頭をかすめました。けれども、娘という時間が長い私の方が、お医者さんよりも確かだというある確信のようなものがありました。どこかのヨットスクールではないけれど、「私が治す」という感じでした。五時間以上の点

滴のうえに、冷たい食事と殺風景な病室。そんなことで病気がよくなるはずはないという気がしました。娘のきげんの良さが、唯一の私の支えであったことは、言うまでもありません。

ところが、家に帰ってわずか数時間のうちに、十数回の下痢を始めました。それでも、娘のきげんの良さを頼りに、あたたかい食事と快いねむりを保障しようとが



ばりました。幸い、翌日には、だいぶん固いうんちになり、峠をやっと越えたという感じになりました。もしかしたら、これは少々危険なかけだったのかもしれない。なぜなら、点滴をしなかったために脱水状態となり、命を落とすという危険も含まれていたからです。けれども、私は、自分を信じようと思いました。

医学などという専門的な分野で、専門家であるお医者

さんから「こうした方がいい」と言われれば、確かに「はい」ときくしかないというところはあります。しかし、お医者さんは、往々にして心と体を切り離し、体を治そうとするばかりで、全人的な治療を思いついてはくれません。同じ危険が、教育という場にも存在するのではないのでしょうか。

点滴、栄養はあるが冷たい離乳食、清潔だが殺風景な部屋。そこには、病氣に対するある一方的な見方しかなく、心と体のつながりを考え、共に治していくという視点に欠けています。そして、それを大きく助長しているのは、検査という目に見えるデータの提示なのです。知育偏重と言われる分野も、偏差値というデータが存在し、今や非行から赤ちゃんのしつけに至るまで心や体の分野にもデータをつきつけられるという状況にあります。そのデータという色めがねを通して、目に見える部分の子どもを見がちなのです。そして、自分の育てられ方に疑問を持つ時、自分の育て方に迷いを生じます。自分は厳しく育てられた、だから自分はもう少しやさしく

育てたい、けれども甘やかすとよくないという。過保護は〇〇%で非行に走るといふ。どうしよう。その結果、あんなにいやだと思っていた親のしかり方で自分もわが子をしかっている、などということが起こるのです。そして、私たちは、生物的本能としての子育ての能力を喪失し、自分の中に存在する自然な感情や子育ての「勘」というものを信じることさえできなくなつて、有名大学の先生の書いた子育て論や、「こうしたらよい子が育つ」などのハウツーものに、まどわされがちです。私は、今回の入院事件で、この「勘」のようなものをもう少し信じてよいのではないかと思うようになりました。データの前には「勘」などという、はなはだあいまいなものは、一笑に付される可能性も大ですが、逆に言えば、所詮データで、人間のわかっているほんの一部分でしかないわけです。「勘」は、確実でないし、確かな証拠ありませんが、人間全体を感知し、データにはない「ある真実」を持っていると思うのです。けれども、私などは、その「勘」自体をすでに失っているようにで

す。「勘」を働かせる前に、さまざまな考えが頭をとびかい、「勘」の機能を解体してしまうのです。そこで私は、子どもを見つめ、多くの人々から話を聞き、本を続み、その取捨選択に「勘」を働かせるようになりました。つまり、データを数多くインプットし、「勘」で選び、自分の中に同化するまであたためて、新たな「勘」を作り上げるといふ大事業にとりかかったわけです。そして、この「勘」がやっと駆使できる頃には、娘ももう大きくくなって、必要もなくなっているのかもしれない。けれども、この「勘」作りのようなものが、私にとっては親になっていくということのように思えてなりません。

今回の入院はたった一泊二日でしたが、さまざまな事を考えさせられました。その中で一番心に焼きついたことは、それでも娘はここにいるということです。新たな信頼関係の中で、娘は私を許してくれ、待っていてくれました。私たち親が、「大きくなれ、大きくなれ」とわが子を待っているのと同じように、子どもたちも、「大

きくなれ、大きくなれ」と、私たちを待っていてくれるにちがいありません。決してあせることはない。ゆっくり親になろう。ゆっくり、ゆっくり。

入院という大きな出来事も終わり、またもとの静かな生活がもどってきました。けれども、前とは少し違う新しい生活です。それは、ちょうど、同じ場所だけれど、高さが少し違う、「らせん階段」を一階分登った感じがします。

* * *